

木曾川



INDEX.....

ふるさとの街・探訪記（穂積町）

水と共生するまち・穂積町

AREA REPORT

水害の歴史を見守る五六閘門

気ままにJOURNEY

祈りの声は大河の流れとともに 祭りの花咲く穂積の夏

歴史ドキュメント

大正改修における木曾川改修事業

TALK & TALK

木曾三川の流路の輪中

民話の小箱

滝坪の柳の老木 穂積町

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思えます。
今回は、長良・揖斐の両大河に抱かれた
かつての輪中地帯・穂積町を特集。
大正改修では、
木曾川工事の概要をご紹介します。



水と共生するまち・穂積町



穂積町空撮



穂積町は、揖斐川と長良川の堆積土砂によって形成された扇状地。十一本の一級河川が貫流し、河間から湧き出る水は豊かな美りをもたらしてきました。その一方、濁水や洪水も解決せねばならぬ課題。明治以降には大規模な河川改修や土地改良事業も実施され、現在は『水と共生するほづみ』を目指して、多彩な事業が展開されています。

地形の特色

岐阜県穂積町は長良川、揖斐川の二大河川にはさまれた輪中地帯。濃尾平野の北西、本巣郡の最南端に位置しています。長良川を境として東に岐阜市、西に揖斐川をはさ

明治初年の牛牧(五六)輪中とその周辺



んで東南町、大垣市があり、南は安八郡墨俣町と安八町、北は北方町と真正町に接し、東西三km、南北五・五km面積約十六・四km²の町です。地盤は海拔五〜十mで北から南へゆるく傾斜。糸貫川、天王川、中川、五六川、犀川など十一本もの一級河川が流れる低湿地で、第二次世界大戦以前は、地中が流れている地下水が自然に湧き出している「河間」が多く見られました。河間水や悪水はいつたんこの地で淀んだ後、向きを定めて下流に向かいます。したがって古来から大雨のたびに中小河川の水があふれ、大洪水時にはしばしば長良川の水が逆流し、大きな被害をもたらしています。

古代の穂積と町名の由来

正倉院に現存する日本最古の戸籍「本實郡栗栖太里」は現在の本巣郡穂積町本田付近ではないかと推定されています。この戸籍によれば、栗栖太里には穂積部を名のる者が三名住んでいました。穂積部とは、臣の姓をもつ豪族穂積氏の私有民のこと。穂積氏は物部氏と同族で、大和国山辺郡を本拠としていた有数の豪族でした。大和朝廷の全国統一に従って、この穂積氏も律令制下の貴族として栄え、美濃をはじめ全国各地に勢力を広げていきますが、その私有民である穂積部も同様に展開していったでしょう。穂積という町の名も、この穂積部の居住開拓によるものなのではないでしょうか。この地方に残る条里

上げさせています。この戦いで焼かれた十九条城は以後復興されることがなく、十九条の集落のほずれにある五輪塔は信益をまつったものと伝えられています。

天正十年(一五八二)、織田信長が本能寺の変で亡くなった後、本巣地方では本田合戦が勃発します。これは西美濃三人衆と呼ばれた安藤一族と稲葉一族による領地争いで、この争いの結果、安藤一族は滅亡。徳川政権樹立以降は、幕府直轄領、加納藩領、尾張藩領など、交錯した支配を受けることになりました。



十九条城(船木城)跡と伝えられる津島神社

穂積町一帯は、根尾川、長良川によってできた扇状地の末端で、河間が自噴するところ。これらの河間を水源とし、上流からの悪水を集めて、天王川、中川、五六川、犀川などの中小河川が形成されています。これらの中小河川は町内の低地を網の目のように流れ、一度豪雨に襲われると、作物などに大きな被害を与えてきました。享禄三年(一五三三)の大洪水は根尾川の流れを変えました。その昔、山口川とも呼ばれていた根尾川は、本巣町山口から東へ流れ、岐阜市西郷、鷺飼黒野より南流し、長良川に注いでいましたが、この洪水で山口の西方、大野郡長瀬村の敷村を打ち破って西南に流れ、揖斐川と合流したのです。

大洪水と河筋の変化

揖斐川は古くは杭瀬川、伊尾川と呼ばれ、本巣郡古橋村の南を東へ流れ、墨俣村で長良川へ合流していましたが、享禄三年の洪水は、藪川という新しい川筋を出現させ、大河となった激流はまっすぐ南へ向きを変え、現在の揖斐川となりました。

天正三年(一五三四)には、長良川筋が

大洪水に見舞われました。現在、岐阜市に沿って流れる長良川筋がこの時つくられた一大河川で、穂積町の東岸を流れるようになり、そして天正十四年(一五八六)には、小瀬村で長良川と合流していた木曾川が氾濫し、羽島郡の東岸を流れる木曾川の本流となりました。このように、頻発する大洪水や堤防決壊により、中山道以南は一面海のようになったこともしばしばでした。

輪中の成立と用水の開発

穂積町域では、糸貫川と犀川の間五六川を中心とした地域に五六輪中、糸貫川の東、長良川との間に河渡輪中があり、犀川の西には、揖斐川との間に古橋輪中ができています。これらの三つの輪中は初めから周囲を囲んだ完全な堤防ではなく、次第に強化され、輪中堤防を完成するに至っています。

五六輪中の成立は宝暦七年(一七五七)のこと。牛牧開門の築堤工事により、完全なる輪中が誕生。この輪中は当初、牛牧輪中または牛牧開門組合の名前で呼ばれていました。河渡輪中の成立も宝暦六年のこと。糸貫川が長良川に合流する付近の河渡・生津両集落の南部に堤を築き、この堤防によって恩恵を受ける八ヶ村は輪中組合を造り、共同して水防にあたることとなりました。こうした各輪中組合は、時として利害が相反することもありましたが、堤防高を相互監視する定杭制度などの諸規定を設け、お互いの利害などを調整しつつ、輪中の共存を目指していました。

その一方、稲作に必要な用水の確保は不可欠な要素でした。河間が自



中川から用水取水 田中秋

噴する穂積町においては水源の確保は比較的容易でしたが、いったん日照りが続けば糸貫川をはじめとするいくつもの河川は水無川に。河間も自然枯渇する状況でした。そこで中川用水の開発や長良川より引き入れた用水、犀川から用水を引き入れるなど、多くの用水が整備され、用水毎に組合が造られて、取水をめぐる調整がなされていました。

明治以降の穂積町

明治以降、当町一帯は名古屋県、笠松県に所属の後、変遷を繰り返して昭和三十一年には現町域を確定しています。明治期には、濃尾震災や幾多の洪水など、多くの災害を受けながらも、治水事業の進展や用水の開発、土地改良事業など、大規模な国土開発がなされ、大正時代になると木曾川上流改修の一環として、犀川改修が実施されています。



昭和40年頃の穂積駅

地場産業としては、明治時代から農家の副業として始められた柳行李の製造が工業化され、やがて全国生産高の八割から九割を占めるほど、成長を遂げています。また、近江方面からレンゲの原種が入り、農家の収入源として有望視されていました。第二次世界大戦後、あれほど有名であった柳行李もレンゲも衰退の一途をたどっています。

交通網としては、JR東海道本線が町内を横断し、県内主要都市を結ぶ国道二十一号が通っており、本巣郡内はもろろん近郊市町村への交通至便の地です。現在の穂積町は、大垣市や岐阜市のベッドタウンとして成長を遂げ、『水と共生するほづみ』を目指し、多彩な事業が展開されています。

ふるさとへの街・探訪記

の遺跡や地名は、律令制下の朝廷との結びつきを如実に物語っているようにです。

荘園時代と異常気象

平安時代の本巣郡には八つの郷がありましたが、郷とは当時の行政単位のこと。律令時代の里にあたります。穂積町にあたる郷は穂積、栗田の二郷と船木郷の一部。穂積郷は現在の穂積、別府地区にあたり、栗田郷は本田地区一帯、船木郷は牛牧地区にかかっていたと推定されています。

天平十五年(七四三)、聖徳太子私財法が発令されると、荘園といわれる私有地が各地に増えてきました。荘園は主に貴族や有力な寺院の所有でしたが、美濃地方にも皇室や摂政・関白をつとめる部の実力者の荘園が多数ありました。当町には摂関家領の生津荘と北部に法勝寺領の船木荘があった。寛喜三年(一一三三)六月八日には、雪が降ったと伝えられています。六月八日は、現在の暦では七月二十六日。記録によれば、真夏の降雪は推古天皇三十四年(六二四)と延長八年(九三三)にしかなかったようです。いずれも大飢饉の年となり、過去のこうした例も伝えられて、当時の人々は不安を募らせた。

さらにこの年の七月にヒョウが、八月に大風雨がおきるなど、全国的な飢饉に見舞われ、このため幕府では徳政令を出すことについて話し合ったといわれています。

戦乱の世から天下統一へ

応仁の乱以降、同族争いが引き金となり滅亡した土岐一族。その後、下剋上の世になると、この地方は戦乱の舞台となります。永禄五年(一五六二)、織田信長は美濃攻めに際して墨俣に砦をかため、さらにこの地に十九条城をかためています。この城には一族に織田信益が入城しますが、斎藤軍の侵攻により信益は討ち死、信長を尾張に引き

参考文献

- 『穂積町史』
- 『通史編上下巻 穂積町町史編纂委員会発行』
- 『岐阜県地名事典』角川書店発行
- 『一九九四穂積町合併四十周年記念町勢要覧』
- 『ヒューマンタウンほづみ2000プラン』
- 『穂積町第三次総合計画』穂積町発行
- 『地名が語るふるさと穂積』
- 『穂積町のあゆみ』穂積町教育委員会発行
- 『広報ほづみ』穂積町発行

金井甚平の功績

中川は穂積町の東西のちょうど真ん中を流れる川。岐阜県真正町で湧き出る河間水が源流で、穂積町の祖父江集落までわずか八kmの小川ですが、水量は豊で八集落の灌漑用に活用されていました。しかしこの中川も洪水や濁水を起こし、人々を苦しめていました。そんな惨状を打開するために、江戸時代になるとこの中川改修が実施されました。

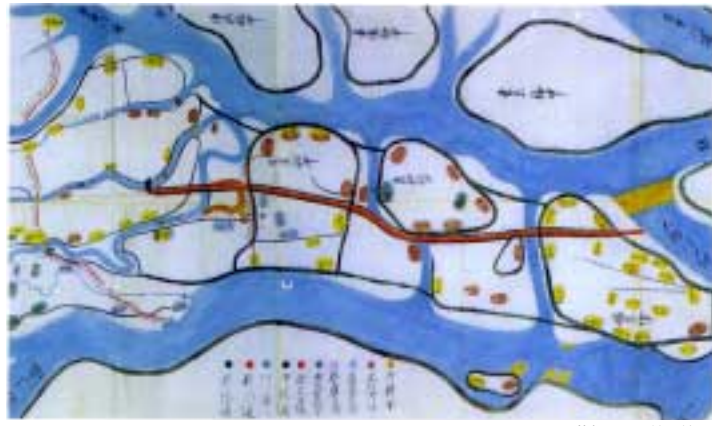
この改修を実現し、人々を救ったのが助定方普請役の金井甚平です。彼の功績を感謝した人々は、本田の通玄寺で今でも毎年二月二十五日の命日に法要を営んでいます。



本田通玄寺在 中川築堤奉行金井甚平の墓

ふるさとへの街・探訪記

二百三十年という歳月を越え、五六川口にたたずむ五六閘門。その築造はまさに五六川流域民の願い。大雨の度に洪水は長良川から犀川に、そして五六川に逆流入。浸水や湛水の被害に苦しめられてきました。そんな窮状を救ったのが、江戸幕府の代官・川崎平右衛門。閘門反対を唱える隣接輪中の人々を説得し、ついに完成させたのでした。その閘門も明治には「たたき工法」で再生。現在は、貴重な治水遺跡として、治水の必要性を訴えかけています。



五六川藩新堀川目録見絵図



五六閘門

水害の歴史を見守る五六閘門

五六閘門築造をめぐる紛争



町内を北から南へ貫流する五六川は、長良川の支流。江戸時代には、穂積町の南端部で中川・犀川・五六川の三河川が合流し、長良川に注ぎ込んでいました。この三川の合流地点は、穂積町でも最も低い場所のため、大雨で長良川が出水すると、犀川に逆流し、犀川に逆流すれば、五六川に水が流れ込み、人々は浸水や湛水に苦しめられてきました。五六川流域の集落は、牛牧・野田新田・十九条・別府・只越・下本田・祖父江・柳一色・上橋本など。各集落は「つた水害を防ぐため、U字型の輪中堤を築造し、水防に務めてきました。しかし、長良川の水位の上昇による逆水を防ぐためには、「閘門」を設けることが必要でした。特にこの一帯は有数の米どころであり、中山道の要衝の地。江戸時代、五六川が五六橋川と呼ばれていたのは、中山道の五六番目の橋がかかる川に当たるところから、こう呼ばれていたと文献には記されています。つたした地理的条件は幕府を動かし、逆水



五六川口の門橋（明治40年6月5日改修完了撮影）

現在の石造りの閘門は明治四十年に改築されたもので、高さ八・五m、長さ十二mの二連アーチ式の水門です。下流側には観音開扉を備え、水位差によって扉が自動的に閉まり、逆流を防止する仕組み。石積工法は、自然石を目地土（モルタル）でつないでつみあげているように見えますが、目地土を採取・分析した結果、目地土はマサ（風化花崗岩の砕土）に約三五％の石灰を混ぜた「たたき」土であることがわかりました。従ってこの閘門は「たたき」土を使い、たたき固め、その表面に自然石を「浮き石」積みにしたもので、このような石積方法を「たたき」工法又は「人造石」工法といいます。この工法は、我が国由来の左官の伝統技術であり、セメントがまだ高価な時期、セメント工法の前段階に属する技術。従って、「人造石」工法は産業の近代化を支えた技術であり、土木技術史上貴重な工法といえます。明治以降の大規模な河川改修や土地改良事業の進展とともに、輪中の存在意義が薄れるのと歩調を合わせるように、閘門の撤去や改修が進み現在、木曾三川流域で住時の姿をとどめている閘門は、五六閘門と愛知県立田輪中の船頭平閘門のみ。五六閘門は岐阜県内

留閘門」を造るようになりました。しかし、上流部と下流部で利害が対立する輪中地帯のこと。閘門の築造は輪中間の紛糾を引き起こしています。その対立を調整し、閘門築造をなし遂げたのが代官川崎平右衛門でした。

治水の恩人・川崎平右衛門

川崎平右衛門は、元禄七年（一六九四）武蔵国多摩郡押立村（現府中市）の農家の生まれ。若い頃から荒地の開墾や用水・灌漑に励み、大岡越前守忠相にその実績が認められて、多摩川の堤防や水門の築造などを任されています。その功績から延享元年（一七四四）農民としては異例の代官に任命されました。この時、平右衛門は五十一歳でした。寛延二年（一七四九）、川崎平右衛門は幕府直轄地の代官役所・本陣陣屋に代官として赴任すると、さっそく本田・只越・別府・十九条・牛牧などを視察しました。その翌年には五六川流域の集落に「五六橋水除門」構建造願を提出させ、彼自身も「意見書」を添付して幕府に具申しています。やがて幕府からも、裁可相成なる旨の通



川崎平右衛門肖像画（川崎昌美氏蔵）

に現存する唯一のたたき構造の水門です。城門を思わせる石造りの五六閘門は、治水の歴史が刻み込まれた貴重な治水記念物。周辺の美しい環境の中で、水害と闘った住時を物語っています。



空から見た牛牧地区

- 参考文献
- 『広報ほつみ』穂積町発行
 - 『穂積町第三次総合計画ヒューマンタウンほつみ2000プラン』穂積町発行
 - 『朝日新聞』五六閘門
 - 一九九三年一月十七日掲載
 - 名古屋大学工学部土木工学助教馬場俊介著
 - 『岐阜県郷土資料研究協議会会報』
 - 『五六閘門』の沿革と評価
 - 第60号高橋伊佐夫著
 - 『平右衛門定孝の生涯』
 - 岐阜県立大垣養護学校東海興良著
 - 『地名が語るふるさと穂積』
 - 穂積町教育委員会発行
 - 『穂積のあゆみ』穂積町教育委員会発行
 - 『穂積町史』
 - 通史編上巻穂積町町史編纂委員会発行



興善寺にある川崎平右衛門の墓碑

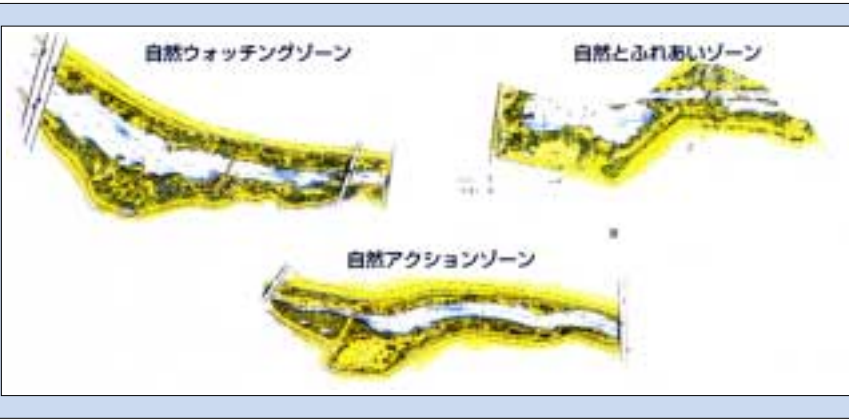
知が届きました。しかし、この目論見はトントン拍子には進みませんでした。上流の美江寺・軽海・十五条・小柿・宗慶の各集落の反対はもろろんのこと、下流の墨俣輪中の人々は閘門の築造により大水害を被るとして、連署をもって代官所に赴き、反対を訴えたのです。困り果てた平右衛門は周辺の集落を歩き回って協力を仰ぎ、尾張藩の協力により、墨俣輪中の集落を召喚して、無害であるとの認定をしたと感達したので、ついに承服したことになります。費用はすべて集落の負担とされ、宝暦六年（一七五六）工事を開始。翌七年春には「逆水留閘門」は完成しています。



花塚の川崎神社

水と共生を図る
五六川修景事業

「水と共生する・ほつみ」を目指す穂積町では、新世紀を展望した「穂積町第三次総合計画」を策定し、長期的かつ総合的なまちづくりを推進しています。「五六川親水公園計画」はその一環。現在の五六川の姿を最大限に生かし、自然の生態系を壊すことなく、人と自然が共生する公園化を目的としています。具体的な計画としては、散策路や魚釣場などの整備や、ヨシなどの水生植物の植栽、展望デッキの設置など、水辺の生息環境を保全しながら、人々が集い、憩う、公園を目指しています。



汽車まつり



8月上旬
明治39年8月1日の穂積駅開設を記念して、町商工会、汽車まつり振興会、町の共催で、昭和31年から始められました。
まつりの花形はD51の1/3模型の「弁慶号」。小学生によるバンドパレードやカラオケ大会などの他にも、毎年楽しい企画も盛り込まれ、親子連れなど多くの人々にぎわいます。

地藏盆の相撲大会

8月24日
地藏盆は穂積町の各所で今も盛んですが、旧中山道沿いの本田地蔵堂では、余興として相撲大会が行われています。戦前は尾張・美濃・江州の三国素人相撲で評判でしたが、今はもっぱら子供相撲。「ハッゲヨイ」のかけ声とともに、小さな力士たちが技を競っています。



穂積町行事

レンゲフェア96.....	4月
汽車まつり・ミュージカル.....	8月
ポップスコンサート.....	9月
クラシックコンサート.....	10月
ポップスコンサート.....	11月
クラシックコンサート.....	12月
ポップスコンサート.....	1月
落語.....	2月



公共交通機関利用
名古屋からJR東海で「ほづみ」駅下車(約25分)
マイカー利用
名古屋I.C 名神高速道路を西へ42.6Km 岐阜羽島I.Cより約20分

気ままにJOURNEY



観音院の大ちようちん

この提灯はこの地の風習である献灯行事にちなんだもの。八月のお盆を迎えるころになると、先祖の冥福を祈るため、献灯行事が行われてきたようです。
とつとも、穂積は大昔から洪水に苦しめられたところ。水害による悲劇もしばしばでした。そんな死者を守つたために行われていたのが献灯行事で、長良川の精霊流しや万灯流しもその名残です。
観音院の献灯行事が定着したのは、織田信長の美濃進出から。幾度かの悪天候下、増水した長良川を渡つて戦つた時には、痛ましい

戦死者が敵味方ともに続出しました。一夏に二度繰り返された戦いの祈りには先に愚子を、後には夫を、というように、働き手の男たちを失ったのです。
残された女たちは、泣いてばかりはいられません。女手一つで災害に耐え、鎌を手に、生活を支えていかなければならなかったのです。
悲嘆の涙、痛恨の嗚咽を呑み込んで、提灯を点した女たち。献灯行事には、そんな哀しい歴史が隠されています。
この観音院には、信長の重臣・柴田勝家にちなんだ念持仏が安置されています。
永祿三年(一五六)、墨俣に橋頭堡を造る合戦で織田軍が大敗を喫した時のこと。尾張方総大将の柴田勝家は、形勢が逆転し、総崩れになって退散しました。落ち延びる勝家は、羽島市竹鼻まで来たところで、傷ついた者の手当をしながら、敗因に頭をめぐらしました。その敗因とは、蜂須賀小六をはじめとする川並衆のただならぬ気配。彼らと折衝を重ねていた木下藤吉郎の動きが怪しいと

にらんだのです。
蜂須賀小六は後に藤吉郎の家臣となる人物。勝家の疑惑もつなげます。勝家は以来藤吉郎と手を組むことはなく、賤ヶ岳の合戦で、秀吉によって滅ぼされました。
この合戦の祈り、観音院に祠られたというのが勝家の念持仏です。
毎年、八月九日には、読経が進む中、「南無観世音菩薩」の大提灯がつけられ、夜には電灯も点されて、参拝者の目をたのませていきます。
美りの季節を待つ藤九郎ギンナン
両手を青空に広げ、鮮やかな緑を繁らせる一本の大木。藤九郎ギンナンと呼ばれる大木は、糸貫川堤防にほど近い、西口越の西蓮寺境内にそびえ立っています。
大銀杏は高さ十三m、根本の周囲三m、樹齢約百数十年で、岐阜県の天然記念物。その実は普通のギンナンより約一倍の重さで、殻は薄くて光沢があり、美味であることで知られています。



藤九郎ギンナン(県天然記念物)

藤九郎ギンナンの名は、この原木を所有していた穂積町の旧家・井上家の当主藤九郎に由来するもの。藤九郎が西蓮寺の住職に帰依されたことから、門外不出とされていたにもかかわらず特別に西蓮寺の銀杏に接木したと伝承されています。
突然変異により大粒の実を実らせるようになった藤九郎ギンナンは、美しい緑を香わせて美りの季節を待ち受けているようです。



長良大橋から上流

祈りの声は大河の流れとともに 祭りの花咲く穂積の夏

夜空に浮かび上る幻想的な大堤灯。勇ましいかけ声を上げる子供力士たち。穂積町の夏は、まさに祭りのシーズン。しかし、空は知っているのでしょうか。まつりに秘められた哀しい涙。
水と闘つたあの時。
だからこそ、人は祈りを捧げ、神に願つたのかも知れません。
穏やかな日々、やすらぎの暮らしを。
美しい表情をたたえる川は、人々の願いを見守るように、ゆるやかな時を刻んでいます。

美しい自然が息づく町

名神高速道路の羽島インターチェンジから北へ二十分あまり。長良川と揖斐川の大河に抱かれた町。それが穂積町です。町内には、天王川、糸貫川、中川など、大小の河川が流れ、緑の水辺では蝉を追いかける子供たちの笑い声。頬を真っ赤に染めて、元氣よく駆け回っています。
子供たちの汗を優しくふきとってくれるのが、ときおりそよぐ川風。まはゆい太陽を浴びて、川面はキラキラと輝いています。
美しい自然が息づく穂積町。この穏やかな町にも、戦乱の地と化した時代がありました。水との闘いに明け暮れた日々がありました。豊かで潤いのある町に秘められた物語。そんな歴史を訪ねて、町並みを歩きまわしましょう。

古代の名残をとどめる内宮と外宮

長良川とその支流糸貫川にはさまれた河渡輪中の南に生津という集落があります。生津には伊勢神宮のように、内宮(神明神社)と外宮(豊受神社)がありますが、これはまだ日本の歴史もあさい古代、垂仁天皇の子孫(倭姫命)が、天照大神の御霊を奉じて大和から東国を巡行した伝説にちなんでいます。
社伝によれば、天照大神は美濃国(久良河宮)岐阜(東山町)にしばらく留まり、その後、生津に逗留して、ここから川を下って伊勢へ向かわれた、と伝えられます。まだ道なき時代。以久良河宮から伊勢へ向かうには、根尾川の本流であった糸貫川を船で下っていくのが自然のコースだったのです。



生津の神明神社

やがて時代は下り、一条天皇の御世。飛騨の匠が生津を訪ねた折り、「生津の神社は並びない神社と伝えられるので、心から敬い、真心を尽くしたい」と、神明神社、豊受神社の二社を再建したとも伝えられています。
内宮・外宮の祭社は毎年五月四日。ともに古式ゆかしいもので、齋王を思わせる巫女や左大臣・右大臣と称する射手が登場し、酒・洗米・おこわ・鮎などをお供えする神供の行列をするなど、伊勢神宮と関係の深い土地柄が偲べれます。
観音様の不思議な伝説
長良川右岸の自然堤防上に発達した集落それが別府です。この地はかつて船木荘という荘園に含まれていたところ。
船木荘は、菅原道真の子孫・高階肥後守の

先祖の冥福を祈る「千日参り」

観音様の伝説はもう一つ、穂積町中切にある観音院に残されています。
このお寺は、「千日参り」で有名なところ。一日参れば、千日間、御利益があるという夏の行事で、高さ八、七m、直径四、一mもの超特大堤灯が境内につるされ、数多くの見物客を集めます。



別府観音堂

先祖遠来の領地でした。その後、七人の子に土地を分け与え、別府は阿闍梨・大法師の領地となりました。
この集落の東方・光泉寺境外仏堂の別府観音堂に安置されているのが木造十一面観音立像。この観音像には不思議な伝説が伝えられています。
延暦年間(八世紀末)、出羽の豪族・大穴大領が、都でつくらせた十一面観音像一体をもつて帰国する途中、杭瀬川のほとりまで来た時に神のお告げがありました。
大領はそのお告げに従って、一体を谷汲山に、残りの一体を大野郡川崎の森に納めて、帰国の途につきました。
しかし、森の祠の観音様は、詣る人も少なく寂しい限り。それを見かねた源氏の武将・岡部忠清は、川崎の森から観音様を移し、母の郷里である別府に観音堂を建立して安置したのです。

この観音様が別府観音堂の本尊で、一本造りの立像。谷汲山華嚴寺にも同じ観音様が安置されているといわれています。
十一面観音立像は岐阜県の重要文化財に指定されています。

特集 大正改修 第二編

大正改修における木曾川改修事業

通常議会で向こう十箇年事業として可決された大正改修は、大正十二年に着工。木曾川改修事業は、大正十三年の川島町の河身整理を皮切りに逐次着手されました。その範囲は愛知・岐阜の十二市町村に及びます。今回はその全容をご紹介します。

木曾川改修の概要

長年に渡る流域民の悲願、木曾川上流改修は大正十年に通常議会で可決され、向こう十箇年継続事業として、二千万円の予算が認められました。しかし、実際に工事が動き出すのはその一年後、大正十一年には羽島市の竹鼻に用地事務所が、翌十二年は岐阜市の忠節町に木曾川上流事務所が設立され、工事は同年八月には揖斐川、十一月には長良川、大正十三年十一月に木曾川と逐次施工されました。木曾川における改修区域は、愛知県大山市から愛知県祖父江町に至る木曾川左岸、岐阜県各務原市から木曾・長良背割堤上流端に至る木曾川右岸で、総延長約二六〇㎞。関係地域は、犬山市、扶桑町、江南市、一宮市、木曾川町、尾西市、祖父江町、羽島市、川島町、笠松町。

- 当初の計画高水量は毎秒約九千㎡でした。
- 改修の主な方針は
- (1) 川島町は河身は数派に分かれ、出水の都度乱流して被害を与えているので数多くの支流流を整理して、本川、南派川及び北派川の三本とし、兩岸には護岸及び水制工を施工。また、北派川の分派口には越流堤を設け、通常の流水は遮断し高水のみ越流させる。
 - (2) 木曾川狭谷部の祖父江町、一宮市、北方町の二箇所は引堤する。
 - (3) 尾西市起町に特殊堤を新設する。
 - (4) 羽島市正木町地先は堤外二重堤を本堤とし、旧堤は廃堤とする。
 - (5) 木曾川町地先に二重堤を新設し、旧堤は廃堤とする。



木曾川改修の実施状況

大正十三年十二月、川島町における河身整理に着手されたのを皮切りに、下流部祖父江町地先では堆積した砂丘が木曾川の狭谷部になつていたので、引堤、掘削を実施し、兩岸の堤防では嵩上げを行っています。木曾川改修の主要な部分は昭和十四年ごろまでにほぼ終了し、それ以後は付帯工事や委託工事が主に施工され、戦後に至っています。具体的な施工状況は上記の表に示すとおりです。

木曾川改修の主要工事

《川島の河身整理》

川島町は木曾川の一大寄洲として点在していた川中島で、洪水時には文字どおり、河中

木曾川上流改修(木曾川)工事施工状況一覧表

No.	工事名	施工箇所	施工年度										主な工事内容・その他			
			11	12	13	14	15	16	17	18	19	20				
1	川島の河身整備	岐阜県羽島郡川島町地先(三洲川)														掘削、護岸、水制
2	右岸笠松町より上流の工事	左岸岐阜県羽島郡笠松町地先 ～岐阜県笠松町前地先														護岸、水制、築堤・(継続)
3	長良川掘削築堤工	左岸愛知郡中島郡長良川町地先 ～旧笠松川掘削地先														掘削、築堤
4	正木の築堤、護岸、水制	右岸岐阜県羽島郡正木町地先														築堤、護岸、水制
5	右岸旧堤築堤	右岸岐阜県羽島郡市島町地先 ～同市正木町南及地先														築堤・(継続)
6	左岸旧堤築堤	左岸愛知郡中島郡祖父江町地先 ～岐阜県木曾川町地先														築堤、護岸・(継続)
7	宮田用水橋補修工	左岸愛知郡丹波郡津島町小淵地先														附属工事直轄施工(用水橋など)
8	玉ノ井二重堤の増強工	左岸愛知郡南濃郡木曾川町玉ノ井 壱小牧地先														堂架脚帯工事、築堤、護岸、橋管
9	右古里町上水道取水場工事及び排水工事	左岸愛知郡尾西市新日町 成戸一玉ノ井地先														名古屋市委託工事、取水場工事、水制(打込)
10	右岸一宮町より上流の工事	左岸笠松町一宮町北古地先 ～丹波郡津島町地先														築堤・護岸
11	住瀬川用水橋門改築	左岸愛知郡中島郡長良川町清原地先														附属工事直轄施工(用水橋門など) 昭和27年12月竣工

歴史ドキュメント



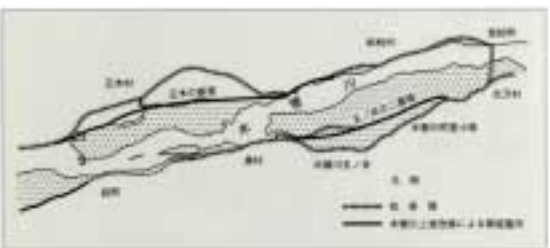
正木築堤竣工記念碑

の島という惨状でした。改修以前の川島町は、町の上流江南市鹿子島付近で南派流が分流し、現在の北派川が主流でした。本川は南派川を分流後、北岸に沿って流れていましたが、笠田島と渡島の間は三斗山の集落によって河幅が狭められ、わずかな流路に過ぎませんでした。こうした河道の整理を目的に、掘削築堤などの工事が昭和四年まで行われ、その他の工事は昭和十四年まで継続して実施されました。工事の内容は、笠田、渡島間に幅三百mの河道を開削し、いまままで河道を狭めていた三斗山などの民有地の寄洲を除去、その土砂で新川の左岸の護岸堤などをつくり、あまった土砂で旧川などを埋め立てています。この結果、木曾川本川にすべての水が流れ込んで北派川にはまったく水が流れることがなくなり、したがって、渡船が唯一の交通機関だった当時、新たな渡船の整備や橋梁の新設が必要になりました。

《正木の新堤》
岐阜県羽島市正木から上流約四kmに至る区間の堤防で、その地名から正木の新堤と呼ばれています。改修以前の堤防は、「く」の字形に大きく湾曲しており、川幅は広大であったため、堤防の湾曲部に位置する大浦輪中は、洪水から家屋や耕地を守るため、川側にさらに輪中堤を築いていました。しかし、この堤防の高さは、決して充分といえるものではなく、大浦輪中は常に洪水の危機にさらされていました。

改修計画では、当初、「く」の字形の堤防を拡築する計画でしたが、大浦輪中水害予防組合からの度重なる要望に応え、輪中堤を本堤とすることに計画が変更され、計画による予算の増加する部分は、地元が負担することになりました。

工事は昭和七年十一月に着工し同十三年十月に竣工。この工事によって当時四十三戸と約七十五haの耕地が水害から免れるようになり、廢堤及び廢川敷となった約二十haの土地が耕地として利用されることになりました。



玉ノ井二重堤とは木曾川左岸約三六、五km地点から三重堤と呼ばれています。あるため、二重堤と呼ばれています。木曾川の堤外地に集落を形成している愛知県木曾川町玉ノ井及びひ里小牧は、その背面に木曾川の本堤である強固な御囲堤を擁していましたが、前方の木曾川に接する堤防は極めて脆弱なもの。昭和十三年七月の大洪水時には、この小堤防の十数箇所が決壊し、集落一帯が浸水被害を受けています。そこで愛知県は災害復旧を機に築堤を要望し、その全工事を内務省に委託しました。

改修計画は、小堤防の湾曲を是正し、延長約二、五kmを計画高水位の高さで施工、川表の小段以下は玉石張護岸で補強することに。また、区域内の悪水は御囲堤に樋管を設けて日光川流域へ排水することとしています。

工事は昭和十四年十月の着工以来、築堤と護岸を平行して施工し同十七年十一月に一旦



木曾川・玉ノ井・付近の航空写真

歴史ドキュメント 7

(6) 他にも必要に応じて護岸、水制法留工・根固工を施工し、また付帯工事として橋梁・樋門・陸門・用排水工を実施。陸門：堤防をある高さで切開き交通洪水時には、これを締切る施設。



の完成を見ますが、排水樋管工事の着手が遅れ、すべての工事が竣工したのは昭和十八年十二月。この本堤防完成によって、今まで堤防外であった玉ノ井里小牧の集落は堤防内となり、紡績工場などが進出、住宅地としても成長を遂げています。

- 参考文献
- 『木曾三川の治水史を語る』建設省中部地方建設局発行
 - 『木曾三川治水百年のあゆみ』建設省中部地方建設局発行
 - 『木曾三川その治水と利水』国土開発調査会発行
 - 『木曾川上流改修工事誌』建設省木曾川上流事務所発行

大正改修のあらまし

大正改修は、木曾三川の上流域の抜本的な河川改修です。大正十年からほぼ二十年の歳月をかけて行われました。この改修は各河川とも計画高水量を安全に流下させるために必要な川幅を定め、湾曲の激しい箇所を整理し、川幅の狭い箇所については引堤を実施しています。本川改修と並行して、支派川改修も行われました。

歴史ドキュメント 8

木曾三川の流路と輪中

安藤萬壽男先生



略歴
愛知大学名誉教授・前愛知産業大学総長・経済学博士
文部省学術審議会専門委員、経済地理学会支部長、愛知県自然環境保全審議会
会長、愛知県都市計画審議会委員等歴任。多年にわたる経済地理学などの実証
的研究や大学教育の発展充実などの貢献が高く評価され平成五年「勲三等瑞宝
章」を受賞。「輪中 - その形成と推移」など輪中に関する著書、論文多数。

濃尾平野の地形と河川水路・輪中
濃尾平野はその西・北・東の三方を山地に囲まれているが、その山麓には断続的に大小区々に分かれている洪積層の台地(例、各務原台地)があるが、それから一段と低く、そして広く一面に沖積層がこの平野に展開する(図1)。
この沖積層を地形的に大別すると、その高位部から 扇状地、自然堤防、後背湿地帯(以下、自然堤防帯と略称する)、三角州の三地域に分かれ、この三地域がもつ地形上の特徴によって濃尾平野の治水や輪中の形態などが大きく異なってくる。
扇状地は一般に沖積平野の中では傾斜が急(例、木曾川では平均3.3/1,000)で、そこを河川は急流で流下し、粗粒の土砂を



図1 木曾川下流の濃尾平野地形分類図
大矢雅彦「木曾川下流濃尾平野地形分類図(1956)を基に、それを簡素化して作製。

堆積し、大洪水時にはしばしば流路を変え、結果として文字通り扇状の地形を形成する。このような急流の洪水が堤内に流入するのを防ぐための方法として、人々は露堤(または錯堤)を築いてきた。雁行する堤防と堤防の間には無堤の部分があり、ここから洪水は堤内に侵入することはできたが、扇状地がもつ地形上の高低差のため、大きくそして洪水時に広範囲に、堤内へ浸水するには至らなかった。そして、この無堤の部分には至らなかつた。例えば揖斐川では大正改修時まで存在していた(図2)。扇状地では主にその扇端部において輪中が形成されている。ここでは扇状地の高位部から洪水が来襲する危険は少ないので、その方向に対しては低い土手を築いて防げばよく、築堤の重点は低位部からの逆水防止のための高い堤防におかれた。すなわちV字形の輪中形態をもつていた(例、河渡輪中、現、岐阜市穂積町、北方町の三市町域内)。
自然堤防帯での平野の縦断勾配は扇状地の場合よりは一段と緩傾斜となる(木曾川流域では0.8/1,000)。従って、扇状地から自然堤防帯への遷急部では洪水時の水位が高まり、破堤につながり易い。このため、この部位には「遊水池」が存在していた。木曾川では川島町全体を含む三派川



図2 揖斐川の露堤

地区がその機能を果たしてきた。長良川では本川とその支流の犀、五六などの諸川との合流部に大正改修時まで美質上、遊水池としての桑畑が存続してきた。
自然堤防帯では川の両岸に形成された微高地の自然堤防上に早くから集落が成立し、それに次ぐ微高地を農地として利用してきた。しかし、その背後の後背湿地帯では沼の形で残存し、水生植物の繁茂にまかせ、洪水時には濁流がここに流入し、自然堤防上の家屋や農地に濁水が浸入しないように洪水位の上昇を緩和していた(遊水池の役割)。
この段階では人々はその村落が上流からの洪水流の激突を防ぐために馬蹄型の堤防を築いてきたが、その村落の下流部からは後背湿地帯に洪水が自由に侵入し、洪水後は後背湿地帯に濁水中に含有していた肥沃な粘土質の土を堆積していった(図3の2)。
自然堤防帯での河川の流路の変化は扇状地上のそれよりは遙かに頻度が低い。すなわち洪水時に広く濁水が拡がっても、その洪水が収まると、多くの場合はそれ以前の水

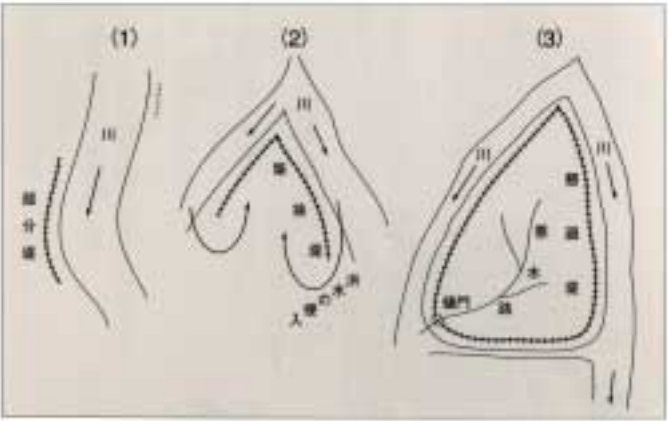


図3 輪中堤の発達過程のモデル(安藤 萬壽男原図)

出現する押堀もその面積が大きい。しかし、自然堤防帯と同じく、一般に洪水による河川流路の変化は少ないといえる。
木曾三川の比較 濃尾平野の沖積層を形成した主な川は木曾・長良・揖斐の三川本支流であるが、これらの三川がこの平野形成に寄与した面積には大差がある。木曾川が流下している流域の山地は長大で広くかつ高く、そのうえ崩壊しやすい火成岩系統の岩石からなるなどのため、その土砂堆積量は他の二川に比べ、圧倒的に多い。一方、長良・揖斐両川はその流域や山地の面積はほぼ等しいが、山地の地形と岩質の差や地盤運動の相異などで、揖斐川の本支流による扇状地は長良川のそれよりは広い。
ところで、これら木曾三川が山地から濃尾平野に出る出口は異なるが、この濃尾平野の地盤が東高西低で動いてきたため、三川は河口に近付くと平野の西南部に集中してくる。このため、この西南部では三川が網状に相互に交錯して流下していた。このことが濃尾平野に特有な水害をもたらした。また特色ある輪中を形成した自然的要因でもある。

ところで後背湿地を開発して新田造成を企画する場合、懸廻堤の築造を最初に必須とするのは、三角州と自然堤防帯の最低位部である。輪中の形成はこの部位で最初に形成される。しかし、ここで一つの輪中に輪中堤ができる。そして、その輪中の後背湿地が遊水池として果たしていた機能が失われるから、その分だけ、その輪中に隣する、より高位部の治水条件が悪くなる。その対策として最初の輪中の隣にも輪中ができる。このように輪中の形成は順次高位部におよび、最終は扇状地の末端部に至るのである。しかし、先発の輪中は後発の輪中ができる。自らの輪中の治水条件が悪くなるので、できるだけ、後発の輪中の形成に対して異議を唱え、後発の輪中の形成に反対したり、遅らせたりする。このようにして、濃尾平野に最初の輪中ができたのは近世初頭であるが、扇状地の末端部に輪中ができた最も遅い場合は明治初年である。

ところで既述したように、近世に河川の流路が固定し、輪中が多数でき、河床が相対的に高くなると、近世の半ば以降、輪中内の悪水が堤外の川に排除しにくくなり、悪水が輪中内に停滞し、水稲の水腐れが不作が続くようになった。この対策として、一方では一枚の水田の一部を堀とし、その土で残った田を高くする(堀田または重田)と共に、他方、悪水路を更に下流側に延長して、外川と合流するように図ったが、これらの効果は十分でなかつた。

TALK & TALK

路に戻る。しかし、歴史上に特筆される程の大洪水時には流路が変わる。例えば、木曾川では天正一五(一五八六)年の大洪水で現、境川から現在の木曾川流路へとその主流が大きく変わったのは、その変化の流路の上流部が扇状地に属しはするが、有名な話である。
自然堤防帯での輪中の当初の堤防は上述のよつに馬蹄型であったが、近世になると後背湿地帯を新田に開発しようとして、このためには後背湿地帯をも堤防で囲み、洪水の流入を防ぐ必要があった。これが輪中の懸廻堤である(図3の3)。かくて輪中の形成は新田開発と密接な関係があり、輪中の出現は近世初頭であつて、これまでよくいわれてきたような元応元(一三一九)年といった早い時期に形成されたものではない。
三角州になると縦断勾配は自然堤防帯よりは一段と緩く(例、ほぼ0.2/1,000)である。このため、上流から押しよせる洪水は三角州上でも破堤しやすい。その上、破堤時に

出現する押堀もその面積が大きい。しかし、自然堤防帯と同じく、一般に洪水による河川流路の変化は少ないといえる。
木曾三川の比較 濃尾平野の沖積層を形成した主な川は木曾・長良・揖斐の三川本支流であるが、これらの三川がこの平野形成に寄与した面積には大差がある。木曾川が流下している流域の山地は長大で広くかつ高く、そのうえ崩壊しやすい火成岩系統の岩石からなるなどのため、その土砂堆積量は他の二川に比べ、圧倒的に多い。一方、長良・揖斐両川はその流域や山地の面積はほぼ等しいが、山地の地形と岩質の差や地盤運動の相異などで、揖斐川の本支流による扇状地は長良川のそれよりは広い。
ところで、これら木曾三川が山地から濃尾平野に出る出口は異なるが、この濃尾平野の地盤が東高西低で動いてきたため、三川は河口に近付くと平野の西南部に集中してくる。このため、この西南部では三川が網状に相互に交錯して流下していた。このことが濃尾平野に特有な水害をもたらした。また特色ある輪中を形成した自然的要因でもある。

ところで後背湿地を開発して新田造成を企画する場合、懸廻堤の築造を最初に必須とするのは、三角州と自然堤防帯の最低位部である。輪中の形成はこの部位で最初に形成される。しかし、ここで一つの輪中に輪中堤ができる。そして、その輪中の後背湿地が遊水池として果たしていた機能が失われるから、その分だけ、その輪中に隣する、より高位部の治水条件が悪くなる。その対策として最初の輪中の隣にも輪中ができる。このように輪中の形成は順次高位部におよび、最終は扇状地の末端部に至るのである。しかし、先発の輪中は後発の輪中ができる。自らの輪中の治水条件が悪くなるので、できるだけ、後発の輪中の形成に対して異議を唱え、後発の輪中の形成に反対したり、遅らせたりする。このようにして、濃尾平野に最初の輪中ができたのは近世初頭であるが、扇状地の末端部に輪中ができた最も遅い場合は明治初年である。

BOOK LAND



木曾三川に生きる
- 長良川流域の人々の声 -
編集 木曾三川水と文化の研究会
発行 山海堂
定価 四千三百円

長良川流域に生きる人々が、川への思い、願いを託した手づくりの一冊。長良川の恩恵や被害を受ける立場から、水や川に対する考え方やその背景を検討し、河川改修が地域に果たした役割と効果、災害時における水防活動の実情と問題点を明らかにし、二一世紀に向けての治水・利水・環境のありかたを総合的に研究し、その成果を発表しています。新しい時代を生きる子孫たちへ、流域に生きる人々への「心の声」を集めた貴重な資料です。

民話の小箱

滝坪の柳の老木

穂積町

むかし、むかしのお話です。
中山道をはさんで生津と馬場という集落がありました。
この二つの集落には不思議な地名が残されています。
滝坪。

山も丘もない平坦な土地なのに、なぜこのような名前が残されているのでしょうか。
それは、もともとこの辺りが糸貫川の扇状地で、
豊かな伏流水がゴボゴボと湧き出し、滝坪のような淵だったから。
そんな滝坪に柳の老木がありました。
その昔、この辺りは家もまばらで、
柳の根本から、
美しい水が滝のように湧き出していました。
ある日のことです。

お婆さんがその水でふんどしを洗ってしまったとか。
すると驚いたことに、一晩のうちに、
その滝は養老へいってしまっ、
あの孝行息子の話で有名な養老の滝になってしまいました。

この柳の老木伝説を今に伝えるお寺が二つ。
一つは馬場前畑町にある超誓寺。
もう一つは岐阜県養老町にある養老寺です。

この二つのお寺には、一本の柳で造られたと言われる
阿弥陀如来が残されています。

超誓寺は、建設当時、滝のそばにあり、
滝の守りをしていたと伝えられるところ。

また、養老寺にある滝守護不動尊も、その昔は、
生津の里にあったものを移し替えたと伝えられています。
この口承については、何の文献も残されてはいません。
しかし、ひよっとしたら、
宗派も異なり、何の関連もない二つのお寺を
それが一本の柳の老木だったのかも知れません。

この柳の老木は近年まで立っていましたが
昭和三十六年の室戸台風で倒れてしまいました
現在、ここは、土地区画整理事業が行われ
土地が高くなり、滝坪公園がつくられました。
昭和五十七年七月、公園には滝坪の伝説を記した
「郷土の伝承」碑が建てられました。



木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分
《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入館料》無料
《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島ICから車で約30分
東名阪長島ICから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平閘門管理所・
木曾川文庫
〒496 愛知県海部郡
立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

川についての理解と関心を深めるため、建設省では今年度から7月7日を「川の日」と定めることとしました。選定理由は、1 七夕伝説の「天の川」のイメージがあること、2 7月が河川愛護月間であること、3 季節的に水に親しみやすいことなどによります。人と河川との関係についてもう一度考えてもらう契機にしようというものです。

編集部では皆様のご意見、ご感想をお待ちしています。宛て先は、木曾川文庫まで。Vol.19の編集にあたっては、穂積町役場、愛知大学名誉教授の安藤萬壽男先生にご協力をいただきました。ありがとうございました。次回は岐阜県南濃町を特集します。ご期待ください。

表紙写真

上：長良川穂積大橋

下左：滝坪公園

下右：十一面観音菩薩像